

以前、F中学校時代の教え子が、県庁近くのエリアにカレーのお店を出しているという情報を入手したことがあった。早速電話をし、本人に確認したところ、店を出して1年余りが経つとのことだった。

そこで、メンバーを集め、その教え子の店で会を催すことにした。狭い店なので、10人も入ればいっぱいである。当日は貸し切りであった。カレーの店でどんな料理が出されるのか期待と不安があった。

私を知っている彼だと、カレーの店を開くという話は意外なことである。彼にもいろいろなことがあったのであろう。今ではおいしいカレーを提供してくれている。「人生万事塞翁が馬」である。彼の人生は、この先まだまだわからない。「人生の本舞台は常に将来に在り」尾崎行雄の言葉である。

彼といろいろな話をする中で、こんなことを言われた。「その人にとって、その先生が恩師かどうかは、こちらが決めること。生徒は先生を選べないので」彼らしい話である。さすがは、F中学校の生徒会長を務めた男である。

我々教員にとっては、担任をしたり、授業を担当したり、部活動の顧問だったりした子どもたちはみな教え子だと思う。しかし、子どもたちからすると、恩師と思える先生とそうでない先生とに分かれるということであろう。

確かに、自分のことを思い返しても、小学校時代の担任の先生は、みな恩師であるが、中学校となると、心から恩師と思える先生は数人になる。カレー店の彼にも、恩師とは思えない先生がいるということなのであろう。

教師になった以上は、教え子の皆さんから恩師と思ってもらいたいものである。だが、大村はま先生の言葉に「教師は、渡し守のようなものでしょう」というものがある。大村はま先生は、次のようにおっしゃっている。

卒業生がいつまでも遊びに来て、先生先生と慕ってくれるのがうれしいという方があります。もちろん、そうでしょう。でも私は、子どもが卒業していったら、私のことは全部忘れて、新しい学校、新しい友達に慣れて、新しい自分の世界を開いて行ってほしいと思います。教師は渡し守のようなものだから、向こう岸へ渡した子どもたちにはさっさと歩いて行ってほしいのです。そして私はまた元の岸へもどって、次のお客さんを乗せてこぎ出すのです。「どうぞ新しい世界で、新しい友人と、新しい先生について、自分の道を開拓して行って」と思いつつ、子どもを見送っています。

私には、大村はま先生のおっしゃることがわかるような気がする。事実、卒業生が職員室に顔を出しに来ることを私はあまり好まない。好みはしないが、ちゃんと対応はしている。話も聞いている。だが、「さっさと新しい学校や環境でがんばりなさい」と思ってしまうのである。よく学校に顔を出す卒業生ほど「うまくいっているのだろうか」と心配になってしまう。何か話を聞いてほしいのではないかと思ってしまうのである。

もちろん、自分が卒業した学校に挨拶に行くのが礼儀だと考えている卒業生もいる。それはいいのだが、明らかに礼儀とは違う場合もある。実際に会わなくても、恩師という存在は、その人の心の中にあれば、それでいいと思う。